クロネトカミ-KuroirO-

皆木紗　司

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
クロネトカミ―ＫｕｒｏｉｒＯ―

【Ｎコード】
Ｎ８８３０Ｋ

【作者名】
皆木紗　司

【あらすじ】
親友の北峰霧璃（きたみねきり）の頼みで、彼女の猫探しを引き受けた主人公・彩（あ）宮早衣（やみやさい）。
難航すると思われた猫探しだったが、ひょんなきっかけで早衣は猫を見つけることが出来た。――同時に、それは彼女がもっとも会いたくない血族、彩宮知子（あやみやともこ）との再会となってしまう…。
『さぁ、その時です。望む望まないに関わらず、我等の歯車は全てそろいましたの。これは招待、いいえ召喚状。

さぁ、終らせましょう？』

知子との再会を機に、早衣の日常は終わり。

――同時に、早衣のハジマリとなった。

“これは、追憶の約束。クロネトカミ”

序文、あるいは独白。

そう、忘れもしない…と言ったら嘘になるのか。まぁ、いいや。とにかくあまり思い返したくもないし、特に思い返す必要もない話。そういう点では忘れてしまえたら楽なのだけれど、あいにくと記憶力は良い方なのでしっかり記憶している。

それは十月と十一月の狭間。秋の終わりと冬の始まりの頃。

そもそも、あの事件は一体どこから始まっていたのか。そんなことは知るよしも無いけれど、しいて言うのならば、まぁ、きっと誰かの悲願とかいうやつなのだろう。それはきっとワタシが想像するよりも昔の、そして深く深く絡み合った運命とか因果とか思考の果て。

錆びついた歯車は、最後の時まで止まらず。軋みながら、終焉（おわり）を待っていた。

そんなものにワタシが巻き込まれたのは、そもそもワタシ自信の悪運と言うべきなのか、それとも単純にこの身に流れる血脈の影響なのか。

老いた魔女が笑う。老いた猫が嘆く。

どうでもいいか。考えたところでどうとでも言えるものだし。ワタシの主観では、あくまでもあれは巻き込まれた事件。たとえ連中が最初からワタシを式に組み込んでいたのだとしても、たとえワタシ自信が選択した故の結論だったのだとしても。

『さぁ、おわらせましょう？』集った因果は収束して終息へ。

さてさて、それではいい加減前置きはここらへんにして。そろそろ、語りましょう。

宣告。宣言。告知。予告。予言。全てが収束した、その時だ。

始まりの時は、十月二十八日午前十一時。
始まりの場所は、S県宮乃市（みやの）、その一角にある高級マンション。

始まりのタイトルは、追憶の約束――あるいは、クロネトカミ。

1．マネキネコ－1

十月の頭に唐突に始まった実家での騒動が終わり、ようやく東北地方の僻地から自分の住むＳ県宮乃市に戻ってきた十月二十六日。

新幹線と電車を乗り継いで、ようやく到着した自分の家の最寄の駅。降りたホームから見える風景に、とりあえず懐かしさを感じつつ一息。

地方の田舎にしばらく滞在したせいか、都会の空気の不味さに僅かに不満を感じたが、同時に帰ってこれたという安堵感もあったのでそこらへんは気にしないことにした。というか戻ってくると、よくあの環境で生きてられたなぁ自分と自己賞賛してしまう。なんせネットなし、携帯電話の電波なし、あろうことかテレビすらないという閉鎖空間…もとい実家。いくら婆さんが俗世の情報を（主に大衆娯楽とかそんなのを中心に）嫌っているとはいえ、あれはやりすぎである。いや、携帯電話の電波はどうしようもないか。仕事しろ電話会社。

都会の携帯電話の電波がまともに入る環境に感動しつつ、着信履歴とメールをチェックする。…お、着信履歴三件に受信メール十件。電話の相手はクロエとキリ。メールもクロエとキリからのもので、クロエが九件とキリが一件。クロエの方は近状報告のようなものなのでスルー確定として、キリの方はなんだろうか？

「…って、着暦今日じゃんコレ」

着信時刻は朝十時頃。丁度ワタシが電車に乗っていた頃だから、気づいたとしても出れなかっただろう。なんせうっかりシルバーシートに座ってましたからワタシ。

現在時刻は十一時四十分。緊急の要件で無い限りまだ間に合うかと、キリに電話…の前にメールをチェック。受信時刻は四十分前。

無駄に長いというか、内容読解が困難なメールの内容を把握するに、どうやら会える状態になったら連絡が欲しいという事らしい。
ふむ、と僅かに思案。で、即電話。
「――じゃ、すぐ行く。迎え？いらないいらない。結構近くにいるのよコレが」
用件自体は直接会って話したいとの事だったので、適当に会う約束を取り付けて通話終了。すぐ会いたいという事は、そこそこ急ぎの事態なのかと予想してみる。…実家のときみたいに厄介ごとにならないといいけど。
さて、と気持ちを引き締めて駅の改札口へ。キリの住むマンションは駅から徒歩七分ほどの所にある、いわゆる高級マンション。本当は荷物を家に置いてから行きたいが、家を経由すると無駄に時間がかかる。それに、まぁとにかく今は誰かと会いたい気なので、直行です。荷物も少ないし、特に問題なし。とっとと向かうことにしましょう。
――そうして、ワタシこと彩宮早衣（あやみやさい）は歩き出す。
――僅かに脳裏をよぎった、厄介ごとの予感を無視して…。

2．マネキネコ－2

Ｓ県宮乃（みやの）市の中心部にあるマンション群。
十数を超えて乱立するマンションの中でも、一際高さで目立っているのが“デルフィナス”という名称の高級マンション。五十二階建ての超高層マンションであるそこは、裕福層と一部コネクションを持つ中流層の人間のみが入居していることで知られており、その厳重な警備と管理、そして訪れるものに与える威圧感から要塞マンションと呼ばれる場合もある。…いや、実際呼んでるのって一部おばさま方と一部マスメディアだけですけどね。

ワタシの親友である北峰霧璃（きたみねきり）が住む部屋は、その“デルフィナス”最上階。五十二階のフロア全てを居住（すみか）とするセレブちゃん。将来の道とか未来の夢とか現実とか全部祝福され約束され、同時に北峰家が用意した全てに束縛されるお姫様がワタシの友人。
警備員の厳しい目線をスルーしながらマンションの中へ。ここの入口は二重構造というか、入口の中にロビーがあって、そのロビーにも左右開閉式の自動ドアがあるという仕様。外の入口の警備が警備員オンリーなのに対し、こちらは警備員・監視カメラ・セキュリティロックという三連コンボ。扉を開けるには鍵代わりのセキュリティカードを通して暗証番号を入力するか、中の住民に開けてもらうという二つの方法しかない。で、ワタシは当然後者なので、インターホンで霧璃に連絡。
で、開いた扉を通過してようやくのマンション内部。最上階まで階段で上る気には当然ならず、エレベーターで最上階へ。
扉が開くとまた扉。五十二階はフロア全部が北峰家の（それも名義は霧璃の）所有なので、一フロアが丸々一戸となっている。そのため、玄関が各部屋と別にここにも設置されている。しかもオート

…いや、贅沢にもほどがあるというか、毎度なんとなく呆れる。
扉の脇に設置されたインターホンを鳴らすと、いらっしゃいませと扉が開く。中には使用人の方数名と、燕尾服とか着てる初老の執事さんが一名。そして。

「お待ちしておりました、早衣」
「お待たせ。久しぶりだね、キリ」

それら人間を従える、北峰霧璃本人がいた。

■■■

「単刀直入に言って、早衣が欲しいの」

会話開始ゼロ秒。早速いつも通りどこか間違えている霧璃の一言が飛び出した。あんまりにも久しぶりすぎたので、思わず飲んでたコーヒー吹きだしそうになった。
「…キリ、それなんか言葉抜けてない？」
数秒、右斜めに首を傾げる霧璃。うん、その仕草は可愛いんだけどね。霧璃が自身の発言の間違い探しに没頭している間、何気なく視線を部屋に泳がす。
北峰霧璃と使用人たちに迎え入れられ、案内された霧璃の自室。霧璃以外は執事さんを除いて、用事が無い限り進入禁止という自室は、これまたファンシーに彩られたメルヘン空間。
どこかのゴシック&ロリータのブランドのファッション雑誌記事に使われそうな空間とでも言うべきか。壁紙は淡いピンク、絨毯は深紅、家具はパステル調のイエローやらピンクで統一されていて、所々にハートやらティディベアとかの柄があしらってある。それだ

けでも甘ったるい感じのする部屋には、これまたティディベアやらハートのクッションで彩られ――もとい埋まっている天蓋付きベッド。（しかもアンティーク調）

…ブラック無糖のコーヒーを飲んでいるはずなのに、砂糖たっぷりどころかシロップまで混入した甘々のコーヒーを飲んでいる気になる。正直、このメルティな空間は落ち着かないんで勘弁していただきたいのだが、まぁ流石に長い付き合いなので慣れっこだ。

「…あ、力？…は違う…あ、そう早衣の助けが欲しいの」

ですよね。色々妄想を膨らませてくれる発言をどうもありがとう。

「それで良し。まったく…」

開始早々いつも通りのスタート。約二ヶ月ぶりに再会した親友は相変わらずのままであり、どこか安心すると共にやれやれと溜息を一つついてみる。

北峰霧璃。性別は女。北峰家の長女。ワタシとは中学時代からの付き合いであり、大のつく親友。学業とかの成績は満遍なくいいのに、とんでもなく天然なお姫様。中学時代の愛称はキリリ。高校時代は学校の教育方針と雰囲気の都合でキリリとは呼べず、以降は偶にキリリと呼ぶ以外はキリと呼ぶ。

「それで？助けって、具体的には何をすればいいのさ」

「…えっと、猫探し。クルリオン、いなくなっちゃって…」

クルリオン。…あぁ、そういえばなんか足りないなーって思ったらそうだ。霧璃の愛猫たる白猫クルリオン嬢が見当たらないじゃないか。

「いなくなったって、いつさ、それ？」

「一昨日。気づいたらいなくなっちゃって、外とかも探してもらってるんだけど…」

成果無し、か。なるほどね。

「しっかし、ここ五十二階、地上百メートルもある高層マンションだよ？外って、そりゃ…」

猫はワリと高い所から落ちても上手く着地するというが、さて百

メートル級はどうだろうか。ベランダ伝いに降りていけばもしかしてなのだが、このマンションのベランダには出っ張りが少ない。少なくとも下におりていく出っ張りなんて皆無のハズだが…。
「…うん、解ってる。けど、中にいない以上外のハズで、…その、最悪の場合でもいいからちゃんと見つけてあげたいというか…」
　言いながら徐々に涙目になっていく霧璃。彼女とクルリオンは幼い頃から一緒だったというから、その心境は心配で心配で仕方ないのだろう。最悪の場合というが、おそらく一番そうであってほしくなくて、しかし彼女自身はここを出る事ができないから周りに任せてただ待つことしかできない。
　雁字搦めのお姫様。永遠に幸せでいられるけれど、自由を奪われたお姫様。…で、そんなお姫様がお付きの兵士もとい使用人たち以外に頼れるのは、楽しい時間を共有した騎士様一人。

…もちろん、その騎士様とはワタシの事である。

「オーケー、引き受けた。ただし私なりのやり方になるから、結果がどうなるか解らないよ？」
　で、もちろん承諾するのがワタシです。親友の頼みとあれば断れないし、なにより可愛い女の子の頼みを断るのはどうかというものでしょう人間として。……いや、まて、その発想も人間としてどうなんだろうか？少女趣味？
「任せる。クルリオンと、一緒に帰ってきてね…？」

　任されたと、座っていた椅子から立ち上がる。
　さぁ、それじゃあ一つ、猫探しと参りましょう。

幕間・通話記録ー1

（十月某日・午前・発信者キリサキ）

…やっぱりトライアルは必要？

唐突に始めちゃ心臓に悪いって言うかさ、ほら、なんというか準備運動無しでプール飛び込むみたいな？

あ、いや、それだと心臓に悪いのは飛び込んだ本人か。違うなぁ…、こうさ、見てるこっちの心臓に悪いと言いなおそう。いい例えがないや。

えー。

いきなりやっちゃうの？

ノリ気しないなぁ…。

いや、彼女がやる気なのはいいんだけどさ。空回りっていうの？そういうの困るわけでしょう？

あー、はいはい、解ってます解ってますよーだ。ただあの娘（こ）、結構我侭というか気が強いというか、…ツンデレ？…は違うか。とにかく、その正確が仇にならにといいんだけどさ。こないだだって勝手に動いたし、あやうくそっちからの承諾なしで事を起こすことに――。

え？ちょっと待った。本家は動かないのコレ？

げー、マジですかー。ていうか放置ってどういうことよー。そもそもこんな事放っておいたら、面目丸つぶれじゃんあっちもこっちも。こっちに動けって要請しといて、それは反則です反則。

…うん？
…あー、なるほどね。そういうこと。
はいはい。婆さんの意向に従います。従いますってば。
めんどくさいなー、もぅ。
…ただでさえ魔女は苦手だっていうのにさ…。
うっかり殺してしまっても責任取れないよ？
はーい。それじゃ、ユイと魔女が合流次第、件の彩宮早衣に接触許可しますねー。
それでは、次は“御使い”確保後に…。

（通話終了）

3．クロイロオヒメサマ

さて、とんとん拍子で話が進んでしまったワケなのだが。

「…困った事に、猫探しってやったことないのよねぇ」

時刻は十二時三十分。ノリと勢いで決めた上に、さらに流れでマンションを出てしまったお昼時。…しまった、やっぱりお昼ご飯のお誘いは受けとくべきだったと地味に後悔。でも、早く安心させてあげたいので、まぁいいかと近くのコンビニへ。

適当におにぎりとお茶を買って捜索開始。と言っても周りを注意深く眺めながら適当に歩くだけ。捜索というよりは、どちらかというと散策という雰囲気。まぁ、ワタシの役割は捜索役というより囮役だろう。上手くいけばクルリオンの方から、ワタシに近づいてきてくれるかもしれないし。

そんな感じで捜索続行。時々、人があまり通らない路地などに入ってみたりしながら、二時間少々でマンション街近辺を走破。進展はまったく無し。そもそもこの辺りは霧璃の使用人さん達が重点的に捜索したはずなので、見つからなくてもおかしくない。

「…となると、駅前の方に足を伸ばすしかないのか」

マンション街の近くの住宅街のほうは使用人さん達が展開しているらしいので、ワタシは駅前方面へ。流石におにぎり一個じゃ足りなかったのか、胃袋が空腹を訴えている。ぐるぐる、視界もちょっとぐるぐる。

休憩も兼ねて、途中にあったファーストフード店に立ち寄ることにした。

そういえば、しばらく実家暮らしだったのでハンバーガーも久しぶりだ。ちょっとテンション上がってみたり。

立ち寄ったファーストフード店は全国的に有名なハンバーガーの店。空腹を程よく刺激するいい匂い（ただし油っぽいので、満腹時はちょっとした地獄）に包まれた店内。昼食時も過ぎた店内はすいていて、数名の暇人…じゃなくて客がちらほらと見受けられるだけ。うん、混雑してるのはあまり好きじゃないので良好良好。意気揚々と店内へ。

「あ、ヤサイ先輩だ！」
「む、早衣様…？」

が、突然気が変わったので入口で百八十度回転。何も見てないし、何も聴いてない。そうだ、そういえば実家に行く少し前くらいに、新しいイタリア料理の店が出来たという話を小耳に挟んだのを思い出した。思い出したんで、休憩はその店でまったりと過ごそうじゃないか。確かこの辺りに出来たって話だったし。そう決めた、イエス。そう決めたんで、とりあえず…。

「あー！逃げるな！逃げないで下さいせんぱーい！久しぶりなのに露骨にスルーはどうかと思います！」

…とりあえず、右手を離してください。というか何で入口から一番離れた奥の席から、ほんの僅か数秒でワタシの手を掴めるんだろうか！行動速いってレベルじゃないよね！？
「…天奈（あまな）…急用が出来たんだ。出来たんで行かせてくれ」
「だーめーでーすー！先輩明らかに超暇つぶしと食事を兼ねた顔して入ってきたじゃないですか！」
どんな顔だそれは。あと暇はしてない、本当に忙しいのです猫探しで。

――残念ながらイタリアンはまたの機会におあずけとなるようで

す。当初の予定通り、昼食はハンバーガーで決定。わーい。
テンション一気にダウンしながら、ワタシの右手を掴むトラブルメイカー…もとい顔見知りの女子高生を睨んでみる。
「相変わらずというかさ、もうちょい周りを見なさい天奈。一応公共の場ね」
雪枝天奈（ゆきえだ あまな）。中学時代の後輩で、学年は二つ下。ワタシが中学を卒業した後も、何かと交流が続き今に至る腐れ縁。ルール無視の暴走少女。取り扱い注意の札でも貼っておきたい。
「うっす。じゃ、ご一緒しましょうよ先輩！クロエちゃんもいますよー？」
天奈が座っていた席をよく見れば、たしかに対面にもう一人誰かがいた。もちろんそっちも顔見知り。
席に向かう前にレジカウンターでハンバーガーセットを一つ注文。会計を済ませて待つこと数分、出来上がったハンバーガーとポテトとコーラの乗ったトレーを受け取って、天奈達の待つテーブルへ。
「はい、お待たせ。久しぶり、黒衛（くろえ）。そっちはどうだった？」
「お久しぶりです早衣様。京都は外国人だらけで疲れました」
天奈の対面に座りながら、隣の黒衛に挨拶。
「あー、何、ってことは御嬢様と観光だったの？」
「はい。一週間ほど神宮御嬢様と古都巡りでした。…あ、早衣様によろしくと」
なるほどねー、と天奈置いてきぼりの会話を黒衛と交わす。ワタシが東北の実家に滞在していた間、黒衛は京都近郊の“神宮”御本家に戻っていたという話。御嬢様についてはさて置く。
「京都巡りいいなー。私も巡りたい！そうだ、京都行こう！」
…いってらっしゃい。
天奈の言葉はとりあえずスルーして、今は燃料補給です。
「放置プレイってやつですか？先輩S？S？」
「受身は苦手、とだけコメント。あと放置プレイではないので悪し

からず」
　是非ともそういうプレイは殿方とお楽しみください。そういう趣味はワタシにはありません。
「で、先輩はいままで何してたんですかー？田舎に帰ったって聞いてますけど」
「まぁね。ちょっと遠野物語巡りとしゃれ込んでました…っていうのは嘘で、実家にちょっと軟禁されてたのよ。こっちには今日帰ってきたばっかりなんだけどね」
　へー、と相槌を打つ天奈。一方、何故かジト目で睨んでくる黒衛さん。…あれ？ワタシ何かシマシタカ？
「まぁ、帰ってきて早々ちょっと用事を頼まれたんだけどね。しかも特急で。そんなワケなんで、忙しいってのは本当なのよ」
　とポテトを一気に食い尽くすワタシ。ハンバーガーは既に完食したので、残るはポテト半分とコーラのみ。
「…用事。章宮（あやみや）本家からの用ですか？」
「いや、霧璃の頼み。…猫探しなんだけど」
　さらに睨まれる私。露骨です、超露骨に睨まれてますワタシ。けどもうちょっとスルーします。
「キリリ先輩とは、懐かしい名前ですねー。卒業してから会えなくなっちゃいましたけど、元気なんですか？」
「うん。元気元気。後でメアド教えてあげようか？天奈なら霧璃も喜んで承諾しそうだし」
　元気にニートしてるよー、とは言わない。親友の名誉のためにも、こればっかりは絶対言わない。いや、まぁ、実際の所無職ではないのでニートではないのだけれど。
　わーい、と両手を挙げて喜ぶ天奈。対照的に黒衛は不機嫌度マキシマム。なんでだろーなー、なんて白々しくとぼけたいところですが、理由は大体見当がつくのでどうしたものか。
「…黒衛。ひょっとして連絡入れなかったこと怒ってる？」
「いいえ。怒ってません。連絡くれなかったことも、ただいまメー

ルもくれなかったことも、帰ってきて早々に霧璃様のところに行ってしまったことも怒ってません。怒ってませんので、どうぞ気にしないいで下さい」

気にするなという方が無理ですよ黒衛さん。

黒衛。本名は黒衛（くろいまもり）。本人が嫌がるんで呼び方はクロエと呼ぶ。普段はクール、偶にこんな感じで拗ねる少女。ワタシとは二年ほどの付き合いになる。関係は…相方というか、相棒というか、従者というか、とにかく実家絡みで知り合った関係。何処か歪んだ信頼…というより信仰をワタシに向ける困った子。かまってあげないとすぐ拗ねる娘（こ）・黒衛ちゃん。と記憶しておきなさい。

「あー、いや、ごめん。なんというか流れに流されたといいますか。この埋め合わせは後ほどしっかりしますんで許してください」

ね？と両手を顔の前で合わせて謝罪。やや不満そうな顔はしてるものの、先程よりはいくらか和らいだ表情で頷く黒衛。とりあえず許してくれたみたいでなにより。

埋め合わせっていうのは、どこかに一緒に出かければ大体ＯＫなので、後で適当に誘うとしよう。

…にしても、ホント我侭だね黒衛。霧璃とは違う意味でお姫様です。

可愛いので許す。

4．マネキネコ－3

「うーん、私は見た覚えないですねー」
「……」
で、天奈と黒衛に事情を説明すること一分半。大雑把な状況説明だったが、まぁ別に込み入った事情なんて無いので比較的シンプルなのだ。
「そう。ま、目撃談なんてアテにしてなかったけどね。アンタ、結構大雑把に生きてるし」
「ひどッ！？　先輩、いくらなんでもそれはないです！　……大雑把……むぅ」
私の言葉に反論する天奈。しかし、思い当たる節でもあったのか、数秒で意気消沈してしまった。大雑把というより勢いで生きていると言うべきだったか。
「ま、猫なんて意識してない限り覚えてないでしょ。見かけても忘れるっていうか、別に大したことないって感じで記憶が上書きされちゃうっていうか」
「……いえ、流石に覚えているのではないでしょうか。住宅街ならさて置き、この辺りに野良猫は少ないですし」
意気消沈した後輩のフォローのつもりで言った台詞に、黒衛さんからまさかの反論。確かに、静かな住宅街に比べて、開発が進んで喧騒に包まれている駅前で猫を見た覚えはない。見たとして、それは保健所の人間に捕獲された野良猫くらい。
「え？私、猫なんて家の近くでも見たことないっすよ？」
「…天奈さんの家は住宅街というより駅前寄りの位置にありますから。あの辺りも、そんなに野良猫とか野良犬とかいないですよ？」
ついで言うと、宮乃市は今野生の犬とか猫の撲滅に力を入れているらしいので、いたら直ぐ保健所に捕獲されてしまうのだ。確か昔、

愛犬だったか愛猫だったか、その手の動物保護団体とごたごたを起こしたことがあったと記憶している。
「むー、そういうクロエちゃんは猫見たの？」
「しょっちゅう見ます。私の住むアパートは住宅街の奥の方にありますし、早衣様のアパートの近辺も結構います。……ですが、早衣様の言うような白猫は見た覚えがありません」
二人からの目撃談は無し。まぁ、こんなところであっさり情報が手に入るとは思ってなかったので、別に問題はない。ワタシがアテにしているのは目撃情報よりも、人手なのだ。特にこの二人は、実働部隊としてはかなり頼もしい部類に入る。
「ねぇ天奈、黒衛、このあと暇なら手伝ってくれない？　ちょっと一人だと骨折れるのよコレ。かといって霧璃の使用人さん達と一緒にっていうのはちょっとね」
なんというか、あの人達はあの人達の間の連携がすごすぎて、他人の私が立ち入る隙がないというか。逆に足引っ張ってるんじゃないだろうか？　と錯覚してしまうくらい凄い連携プレイっぷりなのだ。関係者以外立ち入り禁止な集団とは手を組みたくない、とまでは言わないが出来る限り遠慮しておきたい。
「うーん。ごめんなさい先輩、私この後塾があるんで無理っす」
「あー、そうか、アンタもそういう時期っつーか、そういうところは真面目なのね」
雪枝天奈、高校三年生。現役受験生というやつである。普段は勢いで生きているくせに、こういう比較的真面目なところは真面目に押さえている。なので別に驚くことはない。
「……先輩、そこはオーバーリアクション気味に驚いて欲しいところっす。えぇ！？　アンタが塾！？　みたいな？」
「……いや、アンタがそういうところ真面目なのは知ってるから。というか、驚いて欲しかったらもうちょっとおどけてみせなさい」
ちぇー、と肩をすくめる天奈。
一方、黒衛といえば。

「それで、どこから捜索を開始すれば良いのですか？」
すでにやる気満々モード。頼もしいことこの上ないが、ここまで従順だとなんだか悪い事をしてしまったような罪悪感を感じてしまう。
「んー、とりあえずワタシと一緒に行動。駅前を中心に捜索するから」
「承知しました」
席を立つ。すでに食事も完了しているし、長居しているとあっという間に日が暮れてしまう。
特に解散に対する反対意見も出ず、ワタシ達は店外へ。ワタシと黒衛はこのまま一旦駅前の広場へ向かい、天奈はこの近くの進学塾へ。丁度この店がお互いの目的地の真ん中くらいに位置しているので、必然的にここで天奈とはお別れである。
「あ、そうだ、先輩。何もしないのもアレなんで、私も塾の友達に猫の話聞いてみますね！　ひょっとしたら見たって子いるかもしれないし！」
「ん、頼む。もし当りがあったら連絡ちょうだい。それじゃ、またね天奈」
またね、と片手を振って走り去って行く天奈を眺めながら、ワタシと黒衛は駅前広場へ。
「……さて、それじゃ、始めますか。黒衛、アンタの目アテにしてるよ」
「はい、お任せください」
さて、それでは猫探し第二ラウンドと参りましょう。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8830k/

クロネトカミ-KuroirO-

2010年10月14日16時05分発行